



と話したこともありましたが、「指導員がそのことに甘えていてもいけないよね」ということもたしかめあつていました。

しばしば打ち明け話を聞いていた指導員がカオリにそのことを伝えると、「大丈夫、私たちが話を聞いているから」と、まかせておいてほしい様子でした。私たちは、「せつかくがんばっているのを邪魔することはしないよ」「なにかあつたら指導員もすぐ手助けするよ」と伝え、しばらく様子を見守ることにしました。

それから何か月か後、「もう、汐里にキレた!」と沙織が指導員のところに飛んできた。打ちあわせで報告がありました。「そんなこと言っても、私たち親友だよ」と沙織が尋ねたところ、汐里は「私には親友はいない」と答えたのだそうです。

「それはキレるよね」「そうだよ、

そんなことを言われたらね……」と話がはじまった打ちあわせは、「汐里はなんでそんなことを言ったのかな?」と考えることにつぎきます。

「いままで何度かぶつかつていたら言つてしまつたのかな?」などと考えるあつているうちに、私は、数年前に学童保育に在籍していた汐里の姉・美野里のことが頭に浮かんできました。今回の汐里のズバズバとしたもの言いが、美野里に似ていることを思い出したのです。そういえば、美野里はほかの子と一緒に過ごすことはあまりなく、一人でも平気な様子で本を読みながら過ごしていました。

私は、同僚に美野里のことを伝えつつ、「これは、一つの仮説だけど……」と話をはじめました。学童保育で物事を考えたり、判断したりしようとするときに、私はできるだけ三つ以上の仮説や選択肢を立てるところから考えを

進めるようにしています。その場合、ありそうな仮説や選択肢だけでなく、「ほぼないと考えられるけれど、もしかしたらあるかも……」というものもあえて考えるようにしています(余裕がなくなると、それができなくなることもあります)。

私は、「汐里と美野里は、姉妹とはいえ別人格なので、違う考え方をするかもしれないから、『もしかしたら』という仮説として聞いてほしい」と前置きをしたら、つぎのように話しました。

「沙織は親友という言葉に『いつも一緒にいる仲よし』という意味で話したのかもしれない。それに対して汐里は親友を、本やアニメのなかで描かれているような『相手のために自分のすべてを投げだしてもかまわないくらい深い関係』と理解していて、『自分には(そこまで)親友はいない』と答

えた可能性があるんじゃないかな」

私たちはこのように打ちあわせを重ね、二人の関係について「どう理解するか」「どう関わるか」を考えつづけました。しかし、汐里はだいたい学校から家に直接帰ることが増えていきました。仲間たちとの関係が開れてきていることを察しつつ、なぜそうなつてきているのかわからず、汐里も苦しんでいるようでした。

私は、汐里と話をすることにしました。「沙織とこんなやりとりをしたこと、おぼえてる?」と「親友」の話を探ねると、汐里はすでにおぼえがないようでした。それでも、「もしかしたらね」と指導員間で話しあつた仮説を伝え、

「沙織にしてみたら、仲よしだと思つている汐里から、『そうではない』という答えが返つてきたら、キレるかもしれないね……」

そう話すと、汐里は納得したような

様子でした。

その後の汐里は、家に直接帰る日が多いのは変わらないものの、「学童六ザ」などに参加することを楽しみにしていましたし、「冒険旅行にも参加したい」と考えているようでした。沙織やカオリも、学校で汐里の意見を聞き、企画を考える際に反映させている



ようでした。

「絶交宣言」!?

「ようやく、みんなで無事に冒険旅行に行けるのかな」と感じつつ見守つていたある日、沙織から、「私と汐里、絶交したから」と報告がありました。「絶交」の言葉にびっくりして聞き返すと、「大丈夫、二人でちゃんと話したから」と言うのです。翌日、汐里にも学童保育に来てもらい、二人から話を聞きました。

二人ともおちついた様子で話をしてくれました。そして、

「私たちは、オナクラだよ」と言います。よく話を聞いていくと、

「二人は同じクラス(＝オナクラ)だから、今後も関わりあうのはあたりまえのこと。でも、親友なのか違うのかを考えたすと、考え方に違いが出てきてなんだかモヤモヤする。だから、



そういうことで悩むのはもうやめて、オナクラの者同士という関係、距離感でいようと二人で決めて、『絶交』したんだ」

とスッキリした表情で教えてくれたのです。

* * *

翌年、施設の広さとかねあいなどがあったり入所児童数を制限せざるを得ず、新たに入所する子どもの入所枠を生み出すため、五年生の年度末で学童保育を離れた二人。私たちが徐々に目にしたのは、「だしかに自分たちの力でたぐり寄せたい距離感で関わり

あつているんだな」と感じることでできた沙織と汐里の姿でした。

私たちは、「指導員みんなであれこれ考えながら、それぞれの役割を果たしてこの子たちと関わったことが、あの姿につながったんだ」と感慨深い思いで互いの顔を見あわせました。

子どもたちが 気づかせてくれたこと

谷口悠佳

滋賀県近江八幡市 げんきくらう 保護者

わが家は共働き。小学三年生の長女の下には、保育園児が二人。長女が一人っ子だった頃は、保育園からの帰り道などに、その日の出来事をあれこれと話してくれていました。ところが、下に三人生まれてから、わが家の帰宅

後は大騒ぎ。夫と協力しながら子どもたち四人のお迎えをして、帰宅するのは毎日一八時過ぎ。そこからは家事と下の子たちの世話に手いっぱい、長女にかまってやれる時間がまったくありません。長女も隙を見ては、「今日、



学校（学童保育）でこんなことあったよ！」「テスト返ってきたよ！」など